「きらきらしてて、うっさい。」

—2稿—

2025/6/20

雨森　れに

〈人物表〉

丹羽（にわ）　涼（りょう）　（16）高校2年生。見た目が派手。

北島（きたじま）　藍里（あいり）　（16）涼のクラスメイト。保健室登校している。

三竹　燈子　（32）養護教諭

1.

海沿いの道路（朝）

夏の朝。日差しが強く、海面が輝いている。
制服姿の丹羽涼（１６）。自転車をこいでいる。
涼の金髪も海同様、きらきらとしている。
海を見て、砂浜にいる制服姿の女子生徒を見つける。
北島藍里（１６）である。

2.

砂浜（朝）

波打ち際から離れた場所に大きな流木がある。
藍里はその上に座っている。
アトピーを隠すようにカーディガンを着ていて、足元は厚手のタイツ。
海を見ているわけではなく、手元の文庫本に集中している。

3.

海沿いの道路（朝）

涼は藍里を眺める。
そのせいで自転車のバランスを崩す。
が、すぐに立て直し、足を速める。藍里に視線を戻さない。

4.

学校・昇降口（朝）

登校時間で賑やかな雰囲気。
涼は下駄箱から上履きを取り出し、雑に落とす。
踵を踏んだ状態で履き、校内へ。
通りがかった三竹燈子（３２）。
涼の踵に気づき、

三竹　「丹羽くん、上履き」
涼　「（めんどくさそうに）俺はこれでいいの」
三竹　「だめだめ。学校はＴＰＯを学ぶ場所だからね？　それに成長期にそんな歩き方したら将来――」
涼が、話を遮るように、カバンを床に打ち付ける。
涼　「うっさい」
周囲の生徒が涼を見ている。

三竹は動揺せず毅然とした態度。

三竹　「暴力で解決しようとするの、よくないよ」

涼　「しらねー」

涼がその場を去る。

その様子を遠巻きに見ている藍里。痒そうに内肘を擦る。

5.

学校・廊下（昼）

2年生の教室が並んでいる。

ガラスの割れる音。

6.

学校・教室（昼）

ざわついた室内。窓ガラスが一枚割れている。

生徒らが窓から距離を取っている。

涼はひとり窓際に立っている。

右手から流血しているが、冷静である。

涼　「（右手を見て）保健室、行ってくる」

歩き出す涼と、避ける生徒たち。

教室の端には野球のボールが転がっている。

7.

保健室（昼）

一般的な保健室。中央に生徒用のテーブルがある。

涼が入ってくる。血は止まっているが、制服や左手に血がついている。

テーブルにいた藍里が、驚きの表情を浮かべる。

涼　「三竹せんせーは？」

藍里　「職員室。すぐ戻ってくると思うけど……大丈夫？」

涼　「ちょっと切っただけ」

藍里が濡らしたペーパーを持ってくる。

藍里　「拭いたら。あ、傷口は触っちゃだめだよ」

涼　「（右手の指先以外を拭きながら）慣れてんな」

藍里　「毎日ここにいるからね」

藍里がテーブルを指さす。

そこには教科書とノートが広げてある。

涼　「お前さ、転校してきてから一回も教室きてなくね」
藍里　「同じクラスって覚えてたんだ」
涼　「そりゃ――」
　ドアの開く音。
三竹　「ただいま……って血だらけ！」
　三竹が慌てて、涼に近づく。
涼　「（右手を差し出して）なんか、どの指も痛い気がする」
三竹　「見せて」
　三竹は涼の右手を取り、傷を確認する。
三竹　「これは……一応、病院かな。何で切ったの？」
涼　「ガラス」
三竹　「あぁ、窓割れたって……そういうこと」
　藍里が眉をひそめる。
　涼は答えない。
三竹　「北島さん、ここ閉めちゃうけど、どうする？」
藍里　「じゃあ、帰る」
三竹　「ＯＫ。寄り道しないでよ」
藍里　「はーい」
　三竹、涼に質問しながら応急処置をする。
　涼は三竹に相槌を打ちながら、藍里を見る。
　藍里は勉強道具を鞄にしまっている。
　涼のまっすぐな視線に気づいて、
藍里　「おだいじに」
涼　「ん」
　藍里が出ていく。
三竹　「北島さん、いい子でしょ」
涼　「しらねー。さっき初めて話したし」
三竹　「今度おしゃべりしにきたら」
涼　「なに喋ればいいんだよ。つか、ホントうっさい」
　三竹が、ふふっと笑う。
三竹　「よし、おわり。じゃあ行こっか」
　涼は、三竹に連れられて保健室を出ていく。
　一瞬振り向き、藍里の座っていた場所を見る。
　消灯した室内に、優しい午後の光が満ちている。

8.　**海沿いの道路（夕）**

涼、右手に包帯を巻いた状態で自転車をこいでいる。
朝と同じ場所にさしかかり、藍里を見つける。

9.　**砂浜（夕）**

藍里は、朝と同じ流木の上で読書している。

涼　「寄り道すんなって言われてなかった？」
藍里が目を丸くする。

涼　「いっつも驚くのな」

藍里　「だって、なんでここ……」
藍里が涼の包帯に気づく。
涼は、自慢するように右手を見せる。

涼　「縫った」

藍里　「窓、割ったの？」

涼　「しらねー」
涼が流木を背にして砂浜に座る。
右手を空にかざす。グーパーしようとするが、うまくできない。

藍里　「後遺症とか、残るの？」

涼　「将来のことなんか知るか」

藍里　「なんかズルい」

涼　「じゃあ北島は何か考えてんの」

藍里　「海が肌を治してくれたら、何しようって」
藍里が痒そうに内肘を擦る。

涼　「治んの」

藍里　「ママが、潮風がいいんだって」

涼　「いつもいるから、海が好きなんだと思ってた」
会話が途切れる。
夕日が海を照らし、黄金にきらめいている。
ゆっくり落ちていく太陽を眺めるふたり。

10.　**海沿いの道路（夜）**

涼が自転車を押している。

藍里は並んで歩く。
藍里「なんで話しかけてくれたの？」
涼「しらねー」
藍里が立ち止まる。
藍里「いつも『しらねー』」
涼は口ごもる。
藍里「ま、別にいいけど」
藍里が歩き始める。
涼「俺、きらきらしたもんが好きなんだよ」
藍里「（振り向く）え？」
涼「朝とか、海とか。んで、最近、そこに北島がいる」
藍里「あそこにいたから気にかけたってこと？」
涼「じゃなくて。なんていうんだ、これ」
涼が苛立たし気に頭を掻く。
涼「自分もってるの、きらきらしてる……気がする」
藍里「私は逃げてるだけだし。自分があるとかじゃないよ」
涼「どんな場所でも本読んだり、勉強するじゃん。なんか、かっこいいって思った」
涼、首を振る。
涼「やっぱちがうわ。北島がいる場所がきれいだからかも」
藍里「きれいなんて、言われたことないよ」
藍里はうつむいて手を見る。カサカサの皮膚とあかぎれが痛々しい。
涼「そうじゃねぇよ。空気がきらきらなんだよ。わかれよ。頭いいんだろ、バカ」
思いがけず、きょとんとしてしまう藍里。
涼「あとなんだ。窓か。あれは野球部のボールで割れた。んで、なんか割れた瞬間がきれいでさ。触ったら切った」
藍里「え、バカ」
涼「うっさい」
藍里が耐え切れずに笑いだす。
涼もつられて笑い始める。
夜の海にふたりの笑い声が響く。

11. 浜辺（朝）

流木で読書する藍里。
近づく涼。

おわり